

# 待遇表現における意思・希望表現 —韓国人日本語学習者の失礼な表現とそれを回避する方法—

李 承禧

## キーワード

待遇表現・意思表現・希望表現・韓国人日本語学習者・失礼な表現

### 1. はじめに

発話における丁寧さというのは、敬語の使用や語形などの表現形式上の丁寧さだけでは物足りず、意味の上での丁寧さについても考慮しなければならない。例えば、(日本語学習者が先生に向かって)「先生もコーヒー召し上がりたいですか。」あるいは、「先生、夏休みには何をなさるおつもりですか。」と質問した場合、表現形式としての待遇レベルは高く、問題のない発話のように感じられるが、敬語表現の観点から見ると、本質的に丁寧な表現ではなく、かえって聞き手に失礼な感じを与えてしまう。これは、日本語学習者が間違った敬語表現を用いたり、敬語を必要とする場面で使用できなかった場合よりも、聞き手が失礼だと感じたり、話し手と聞き手の関係に大きな摩擦やトラブルを引き起こす恐れがある。

このような「失礼にならないこと」という視点に立った日本語教育には、従来の狭い意味での「敬語」を越えた語形や表現形式に、意味の上での丁寧さを加えた広い意味での「待遇表現」、「待遇コミュニケーション」(蒲谷他 2003)の指導が、聞き手に対して不快感や失礼な感じを与えないためにも不可欠であると考えられる。その一つに、聞き手の私的領域<sup>1)</sup>の制限(鈴木1997)に関する報告があり、聞き手の欲求・願望・意志・能力・感情・感覚などが制限の強い領域に属するとしている。ここではその私的領域の制限の中で、日本語学習者が学習の初期の段階で学び、また、日常生活などにおいても必要とするであろう意思・希望表現に焦点を当て、韓国人日本語学習者を対象にアンケートを実施して、その表現方法について分析する。この結果を基に日本語学習者への効果的な学習方法の提案を行うことを試みる。

### 2. 研究目的

「待遇表現」には敬語の使用と相手への配慮を含めた意味の上での丁寧さを考慮した発

話が必要であることは既に触れたが、本稿では、より重要で日本語学習者には難しいと思われる、意味の上での丁寧さを考慮した発話について韓国人日本語学習者を対象に考察する。

意味の上での丁寧さを考慮した研究例の中で、待遇レベルの高い場面での日本語学習者の「～たい」、「～ほしい」や「～つもり」を用いた疑問文による相手の意思・希望を直接尋ねる表現は、多くの文献（鈴木1989、1997、熊井1989、大石1996など）で失礼になることが指摘されている。これらの報告は、特に目上の人に対して失礼になる表現であると指摘しているが、この意思・希望表現に関する日本語と韓国語の対照研究を始め、その結果に基づいた日本語教育への提案などはほとんどされていない。

本稿では、「コトバ」レベルでの指摘に留まらず、考察範囲を広げて「文章」レベルとして、電子メール（E-mail）による意思・希望表現について調査すると共に、その結果の分析を進め詳細な考察を加えて日本語教育への提案を行う。

まず韓国人日本語学習者を対象に、疑問文における意思・希望表現の使用についてアンケート調査を行う。この調査結果から、疑問文での意思・希望表現が適切であるためには、どのような表現を用いれば良いか、どういった表現が「失礼」にあたるのか、「失礼」にならないためにはどのような待遇的配慮が必要であるのか、また、これまで問題になりやすいとされている「～たい」や「～つもり」を用いて相手の意思や希望を尋ねる表現は、いつも失礼な表現になるのか、などについても考察する。さらに、その成果を日本語学習者（主に韓国人日本語学習者）に対する待遇表現指導の際に生かすための方法について考察し、日本語教育への提案を行うことを目的とする。

### 3. 待遇表現としての意思・希望表現

待遇表現というと、まず最初に敬語を連想する人も少なくないであろう。待遇表現を単純に、敬語を用いて表現する丁寧な言い方の一つであると考えられることもできるが、これだけで定義することはできない。それでは、敬語を使用すればどのような内容の質問でも、丁寧になり失礼さは無くなるのであろうか、次の例から考えてみたい。

①先生、コーヒーお飲みになりたいですか。

②先生、ゴールデンウィークには何をなさるおつもりですか。

この2つの例は正しい敬語表現であるにもかかわらず、いずれも聞き手（先生）は失礼だと感じるであろう。そのように感じられる理由の一つに、目上の人「先生」に「意思」や「希望」を直接尋ねている点があると考えられる。

このように、「丁寧に話す」ためには、単に「です・ます」を文末に用いる表現や、尊敬語・謙譲語などを正しく用いた表現を使用するだけでは十分ではなく、意味の上での丁寧さについても考慮しなければならないのである。さらに、その敬語表現に加えて、その言語が使われている社会での言語表現に対するある種のルール（決まり事）も考慮しなければならない。

例えば日本語による表現では、目上の人に対して以下に示す特徴が見られる。

①ねぎらい表現を使ってはいけない

例えば、「ご苦労様でした。」など。

② 意思・希望を直接尋ねてはいけない

例えば、「先生もコーヒーお飲みになりたいですか。」、  
「週末は何をなさるおつもりですか。」など。

③ 恩恵を与える表現を使ってはいけない

例えば、「私が持ってきてさしあげます。」など。

これら3つに代表されるルールに従う必要もあることを理解しておかなければ、本当の意味での丁寧な表現にはならないであろう。特に、意思・希望表現に関しては、敬語を多用して丁寧に表現しても、本当の意味での丁寧さにつながるとは言い難いのである。繰り返しになるが、失礼さを無くするためには、表現だけを丁寧にすれば良いという問題ではないということが言える。丁寧に表現するためには、もちろん敬語に関する知識を有することは重要であるが、その前に、その言葉が使われている国の文化や習慣を理解しておくことも、気持ちを相手に丁寧に伝えるためには非常に重要なことである。このような理由から考えれば、待遇表現としての意思・希望表現の「適切さ」、言い換えれば「失礼にならない表現」というのは、「敬語」の使用よりも、むしろ「聞く事柄の適切さ」や「表現の適切さ」が重要であり、その「適切さ」によって本当の意味で丁寧であるかどうか判断されるのである。

#### 4. 研究方法

本稿では、これまで対象とされていた「コトバ」レベルでの考察から範囲を広げて「文章」レベルを扱うために電子メールによる意思・希望表現について調査を行い考察する。電子メールによる表現が難しいところは、相手の反応がその場で確認できないところにある。このため、実際のコミュニケーションとは異なり、すべての表現が文章に頼らざるを得ないことから、語彙の選択や表現に配慮や工夫が必要であると考えられる。先行研究においても、日本語では目上の人に対して、「直接その人の意思・希望を聞く表現は失礼になる」ことが指摘されているが、相手と行動を共にする場合や相手の要望に応えなければならない場合などでは、意思・希望を聞く必要がある。そのような場合に韓国人日本語学習者は、失礼にならない表現を用いることを考慮し、また工夫をしているのだろうか。そこで、この問題を明らかにするために、電子メールという媒体を用いて相手の意思・希望を聞く場合の疑問文が、実際にどのように使われているのかをアンケートを実施して分析を行い、次に示す観点から考察を行う。

- (1) 相手レベル+1の人の「希望」を直接尋ねている文が失礼にならないためにはどのような工夫をすれば良いのか。
- (2) 相手レベル+1の人の「意思」を直接尋ねている文が失礼にならないためにはどのような工夫をすれば良いのか。
- (3) 「たい」や「～つもり」を使用することなく、相手レベル+1の人の意思・希望を引き出すためにどのような工夫をしているのか。
- (4) その他に失礼な感じを与えている表現は母語の影響と関係があるのか。

#### 4.1 アンケートの設定内容と意図したこと

アンケートは、相手レベル+1は先生、相手レベル-1は親しい友人という二つの設定で、その相手から届いたメールを読んで、指示した3つの質問を含めて返事のメールを作成してもらう内容である。

なお、アンケートを依頼した時期により、季節の挨拶は異なる場合もある。

##### (1) 相手レベル-1の場合

日本人の友達が学会に参加するためにソウルに来ます。あなたは友達がソウルに滞在する間、案内することを約束しました。その友達から次のようなメールが届きました。

〇〇さんへ  
元気にしてる？  
ソウルの案内をしてくれるというメールもらってとても嬉しかったよ。初めてのソウルだから心配してたんだけど安心したよ。学会が終わっても何日か時間があるから、ソウルの観光もしてみたいな……。本場の韓国料理も楽しみ！待ち遠しいよ～。忙しいのにごめんね、よろしく。じゃあね。

##### (2) 相手レベル+1レベルの場合

日本で教えてもらった大学時代の先生がソウルで開催される学会に参加するため韓国に来ます。あなたは先生がソウルに滞在する間、案内することを約束しました。その先生から次のようなメールが届きました。

〇〇 様  
暑い日が続いていますが、いかがお過ごしですか。  
このたびは、ソウルの案内をお引き受け下さりありがとうございます。初めての韓国なので心配していましたが、お蔭様で安心しました。学会が終わっても何日か時間がありますので、せっかくの機会ですからソウルを観光してみたいと思います。本場の韓国の料理も食べられるし、待ち遠しいです。お忙しいところ申し訳ありませんが、お世話になります。よろしくお願いします。

アンケートは、それぞれ日本人の友達と日本で教えてもらった大学時代の先生が、学会参加のため韓国に来るという設定で、それぞれに、(ア) 何が食べたいのか、(イ) 何処へ行きたいのか、(ウ) いつ韓国に帰るつもりなのか、の質問を含めた返事のメールを書くよう指示した。相手レベル-1の人の意思・希望を直接聞くことは問題にならない場合が多いと思われるが、友達と先生に「同じことを聞く」という設定にすることで、アンケート対象者に「敬語の使い方を見る調査である」と認識させた。また、質問にあえて「～たい」や「～つもり」という表現を用いて指示した理由は、学習者の「～たい」や「～つもり」に対する意識を確認させるためである。この表現をそのまま用いてアンケートの内容に答える人と、友達と先生とで表現方法を区別する人では、意思・希望表現を使った疑問文に対しての意識の違いなどが見られるのではないかという狙いがある。



## 4.2 アンケート調査の対象

本調査では、学習者の日本語の誤用分析は行わないことにするため、調査の対象は中級後半から上級レベルの日本に留学している韓国人日本語学習者に限定し、80人にアンケートを行った。その学習者の滞在期間と学習期間の分布を図1、日本語レベルの分布を図2に示す。

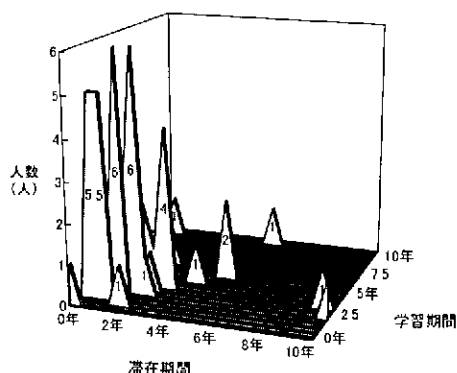


図1 韓国人日本語学習者の滞在期間と学習期間の分布

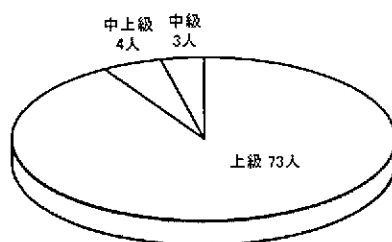


図2 韓国人日本語学習者の日本語レベルの分布

## 5. アンケートの結果と考察

待遇表現として不適切な表現は、相手の意思や希望を尋ねる時に「～たい」や「～つもり」などの言葉を用いた表現だけではないことが予想される。そこで、待遇表現として不適切な表現を、コトバレベル（言葉の使い方で相手の私的領域に踏み込んだ例）と事柄レベル（聞く内容で相手の私的領域に踏み込んだ例）に大別して考察を進める。

なお、本稿に引用されている韓国人日本語学習者のアンケートの例は、誤用もあるが原文そのままを掲載した。

### 5.1 コトバレベル

#### (1) 「～たい」を使用している例

##### ① 「～たい」を用いて相手の「希望」を尋ねている例

( ) 内はアンケート者番号

1	どこに行きたいのですか。(K25)
2	どこへいらっしゃいたいのでしょうか。(K40)
3	ところで、何が召し上がりたいのでしょうか。(K70)
4	どこか行きたいところや召し上がりたいものはございませんか。(K15)
5	好きな食べ物やおいでになってみたい場所などはあるでしょうか？(K9)
6	召し上がりたいものやいらっしゃいたいところがありましたら、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。(K71)

7	特に、召し上がりたいものとか、行きたいところとかございましたら、遠慮なく教えてください。(K66)
8	申し訳ないですが、一番召し上がりたい韓国料理といらっしゃいたいところをおっしゃってください。(K11)
9	せっかくの機会なので、韓国はこれが有名だから召し上がりたいものとか、いらっしゃいたいところありましたら、お話お願いします。(K6)

「希望」は、聞き手の私的領域の中でも制限の強い領域に位置するため、「～たい」を用いて相手の希望を直接尋ねた場合には、聞き手は失礼であると感じる。「～たい」を使用している例には、文末で言い切りの形で使われている例と、文中で連体修飾の形で使われている例が見られた。その中から紙面の関係で代表例を示した。

これらの例は、「～たい」を用いて聞き手の私的領域に踏み込み、希望を引き出している例ではあるが、「～たい」が使われている位置により失礼な感じが軽減されていることが分かる。例4～9のように「～たい」が文中で連体修飾節となる場合や仮定形として使われた場合には人称制限が希薄化され、文末で言い切りの形で使われた場合（例1～3）とは異なり、失礼な感じはしないとの指摘もある。窪田（1992）

それから、「特に」や「一番」のような副詞を併用することにより、希望の範囲を狭め相手の私的領域に踏み込むことを最小限に留めることで、それほど失礼さを感じさせないようにした工夫（例7、8）が見られた。また、相手の希望を尋ねることに対して一言断る表現を前置きとして使用する工夫（例8）や、「せっかくの機会」「これが有名だから」と言う表現で相手の趣味・趣向を直接問うことなく、逆に韓国の初訪問を考慮したような表現（例9）で失礼な感じを無くすなどの工夫も見られた。

このように、「～たい」を用いた聞き手の私的領域に踏み込んだ質問であっても、「～たい」の使用されている位置や、敬語の使用、相手に配慮する表現などにより失礼さを軽減する方法もあり、これらの方法で丁寧さを保つこともできる。

## ② 「～たい」を用いなくて「希望」を尋ねている例

1	先生のお好みを教えていただけたらと思います。(K26)
2	先生の好きな料理をもてなしたいですが・・・、何が良いかちょっと教えてくださいませんか。(K5)
3	韓国の料理もたくさん知られていますが、その中でも好きなものがあったら、遠慮なく何でも言ってください。(K13)
4	今、韓国はガムジャンという食べ物の人気があります。(K2)

ここに示した例は、「～たい」を用いることなく相手の希望を引き出している。例1～3は、「何が食べたいのか」という直接的で具体的な質問ではなく、「～たい」という表現を使用する代わりに「好み」や「好き」という言葉を用いて、相手の希望を広範囲に、かつ、間接的に聞いている。例4は、希望を聞くことなく相手に情報だけを与え、回答を得

ようとしている。上記の例に見られるように、相手の希望を尋ねる時に、「～たい」の代わりの言葉により丁寧さを保ちながら、希望を引き出せる方法も存在する。

(2) 「～つもり」を用いて相手の「意思」を直接尋ねている例

1	いつ日本に帰る <u>つもり</u> なのか詳しくメールを送ってください。(K50)
2	いつ日本に帰る <u>つもり</u> か私におしやってくれれば、その日程に合わせてソウルの案内させていただきます。(K11)
3	いつ日本に帰る <u>つもり</u> か聞かせてください。(K13)

相手の意思を「～つもり」を用いて直接聞くことは、相手レベル－1の人に対しては失礼にならない場合が多いが、相手レベル＋1の人には私的領域に強く踏み込んだ質問となり、失礼になる。「～たい」の場合は、連体修飾が可能であるが、「～つもり」を使用するとそれが難しい。「～つもり」は「です／ですか」と組み合わせて使用する表現方法しかないために、「～たい」の使用方法とは異なり、敬語を併用しても失礼さは回避することができない。

## 5.2 事柄レベル

アンケート結果の中に、語彙の不適切な使用を除き、聞く内容で相手に少し失礼な感じを与える可能性がある項目がいくつか見られた。以下に挙げる6つの項目は、既に分析した「意思」や「希望」のように制限は強くないと思われるため、当然これらの項目に関しては、個人それぞれの受け取り方や感じ方も異なるであろう。しかし、今回のように、コミュニケーションの手段がメールである場合には、同じ質問内容であっても会話のやりとりの中で行う質問とは感じ方が異なることがあるので、特に日本語学習者には難しいと思われるが、待遇表現を考える上では事柄レベルでの失礼な要素の方が「コトバ」レベルよりも重要であると考えられる。

(1) 相手の帰国予定を詳細に聞いている例

① 相手の帰国予定を直接的に聞いている例

1	日本にはいつ帰りますか。(K10)
2	ところで、先生方はいつ日本にお帰りになりますか。(K34)
3	いつ日本に帰る予定でございますか？(K71)
4	ところで、日本にお戻りになるのはいつですか。(K67)
5	また、いつ日本にお帰りになるのかも教えてください。(K61)
6	日本の帰国予定日はいつでしょうか。お知らせください。(K1)
7	いつ予定終えて日本にお帰りになりますか。お知らせください。(作例)

メールの返事に「いつ・・・か？」の表現で直接相手の帰国意思を尋ねたり(例1～4)、また、「いつ・・・教えて」、「いつ・・・お知らせ」、という表現を用いて、相手に帰国に

対する回答を要求する（例5、6）ような聞き方をした場合、相手によっては、出国前に帰国日を聞かれていることに対して、失礼であると感じるかもしれない。また、文章で質問する場合には、聞き方だけでなく接続詞の使い方（例2、4）によっても相手が受け取る印象はずいぶん異なると考えられることから、接続詞の選択にも配慮が必要である。それから、作例のような直接的な質問でも、敬語を使用することで失礼な感じをほとんど無くすることもできる。それから、“いつ”と“か？”の間に修飾する言葉などが多く入ることでも失礼な感じが弱まるのではないだろうか。

## ② 相手の帰国予定を間接的に聞いている例

1	いつまで韓国にいらっしゃいますか。(K15)
2	また、ソウルでは何日のご滞在ですか。(K78)
3	また、韓国にはどのくらいいらっしゃる予定ですか。(K75)
4	それから、韓国でのご予定はいつまででしょうか。(K36)

上記の例は、先生が日本に「帰る」ことを直接聞かずに、韓国に「いる、滞在すること」、つまり、自分との関わりがあることに焦点を当てた表現にしている。結果的には、「先生はいつ日本にお帰りになりますか」という質問と同じ回答が得られるであろうが、このような質問方法を用いることで、丁寧さを保ち失礼さを感じさせない。

## (2) 相手の日程を詳細に聞いている例

### ① 相手の日程を具体的に聞いている例

1	ちょっと具体的な日程をお願いします。(K5)
2	先生の詳しい日程を教えてくださいませんか？(K21)
3	もっと詳細な事情をおっしゃってくださればよろしいと思います。(K68)
4	先生のお日程表についてお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか。(K60)

今回のアンケートの設定内容から考えれば、メールの返信者は先生のソウル案内を引き受けているので、先生のソウルでの日程について質問をすること自体はそれほど失礼ではないと思われるが、上記の例のように相手の予定を詳細に聞いていることと、それに対する回答を求めていることで、失礼だと感じられる。

### ② 相手の日程を間接的に聞いている例

1	韓国での日程はもうお決まりでしょうか。(K48)
2	こちらでのスケジュールはすでにお決まりでしょうか。(作例)
3	H程などもうお決まりでしょうか。(作例)

上記の例は、間接的に「お決まり・・・か」という表現で相手の予定をおおまかに聞く

表現に留めていることや、日程を「教えてほしい」などの表現を付け加えて答えを求めることなく、丁寧さを保ちながら質問をしている。

(3) 相手に回答を要求している例

① 直接指示している例

1	何が食べたいのか、どこへ行きたいのか、いつ日本に帰るつもりなのか <u>詳しく</u> メールを送ってください。(K50)
2	また、予定はどうなっているのか <u>含めて</u> メールで教えてください。(K63)
3	先生のお好きな食べ物と、行かたいところなどと <u>一緒に</u> 返事を書いてください。(K77)

返信者は、相手（先生）の希望を叶えてあげたいという気持ちでメールを書いていると思われるが、上記の例のように自分が知りたいことに関して、相手が必ず返事をするように（相手の行動を促す）指示（催促）する表現の「～てください」に、「詳しく」、「含めて」や「一緒に」などを加えて使用することにより、強要されたような印象を与えている。また、例1の場合は、「～たい」や「～つもり」の使用と、敬語が使われていないことがさらに失礼な感じを増している。

② 間接的にお願いしている例

1	食べ物や、観光へのご希望をお聞かせください。(K72)
2	ご希望を教えてくださいと <u>助かります</u> 。(作例)
3	食べものや観光へのご希望などぜひお聞かせください。(作例)

例2は、希望を教えてくれたら嬉しいというニュアンスが感じられる表現である。また、希望を聞いているのは、あなたに利益があるからではなく、私に利益がある（私のためになる）というような表現であるため、失礼さを感じさせない。それから、例1と3では、「希望を言う」という表現ではなく、「希望を聞かせる」という表現により、相手に「希望を言うてもらうことが当然である」というニュアンスが感じられるようにすることで、相手はこれを干渉されていると感じることなく、親切に思えるのではないだろうか。

(4) 話し手・聞き手が決定権を持っている例

① 話し手が決定権を持っている例

1	先生、学会が <u>終わった日</u> に安国洞をご案内したいと思いますが、よろしいでしょうか。(K28)
2	先生、卒業生達が是非先生とお会いしたいと言っているので、 <u>最後の日</u> にレストランでパーティーを <u>開く</u> 予定です。(作例)

この例が少し問題があるように感じるのは、自分の意見（希望）（学会が終わった日に案内をしたい、最後の日にパーティーを開く予定）を相手に押しつけていることに起因している。本来なら相手を持つべき決定権を話し手が持つことから「敬語表現」的ではないと言える。（蒲谷他1998）

## ② 聞き手が決定権を持っている例

1	もし、よろしければ、私の家にご招待したいと思いますが、いかがですか。（作例）
2	先生のご都合のつく日など、ご連絡いただければ、ご案内したいのですが、いかがですか。（作例）

上記の例はいずれも自分の希望を述べてはいるが、提案に留め、最終的な決定権を相手に与えることで、丁寧さを保ち失礼な感じを無くしている。

## (5) 相手にアドバイスをしている例

### ① 失礼な感じを与えている例

1	何が召し上がりたいのでしょうか。おいしい韓国の料理がいっぱいあるので、考えておいたほうがよろしいと思います。（K70）
2	せっかく韓国にいらっしゃったのですから、何か美味しいものを召し上がって帰られたらよろしいかと思います。（作例）

例に示した「忠告・助言表現」（蒲谷他1998）は、「行動」も「決定権」も「利益」も「相手」にあるという認識に基づく表現であるという点に特色を持ち、基本的には相手レベル+1の人には使いにくい表現である。さらに、「忠告・助言表現」を考える時には、相手レベルだけではなく、用件レベルも合わせて考える必要があり、用件レベルには当然性が高いもの（例：教師→学生、医者→患者、上司→部下、など）と当然性が低いものに分けられる。このため、例えば相手レベルが+1である先生に対して、「なさったほうがよろしいですよ。」という適切な「敬語表現」を用いたとしても、「忠告・助言」に対する「当然性」が低い場合には、適切な「敬語表現」にはならないと言える。

### ② 失礼な感じを与えていない例

1	先生、今ソウルは大変寒いのでございます。いらっしゃる時には寒くないようずいぶん服をご用意くださるようお願いいたします。（K3）
2	先生、両替は韓国の空港でも、銀行でも同じレートで替えられますし、ホテルでも変わりませんので、両替についてはご心配なさらないで下さい。（作例）

上記の例は、自分がアドバイスできる立場であると考えられるため、この場合には失礼

にならない。韓国人という立場から、韓国を初めて訪ねる相手を気遣って、適切なアドバイスをしているので、失礼な感じはしない。

### 5.3 韓国人日本語学習者の母語の影響による失礼な表現

#### (1) 「～てあげる」を使用している例

補助動詞としての「～(し)てあげる」は、主語が行う行為が相手にとって利益となるという前提で使われる表現であるため、相手レベル+1の人にこのような表現を使うと丁寧さの原理(蒲谷他1998)に反することとなり失礼になる。

一方、相手レベル-1の人に「～(し)てあげる」という表現を使用した場合には、親切な感じがすることもあり、失礼な表現にはなりにくい。特に、今回のアンケートの設定内容から考えると、「～(し)てあげる」という表現を友人に使うことにより、相手の初めての訪問に対する不安を無くし安心させる効果も期待できるが、相手レベル+1の人に「～(し)てあげる」という表現を使用すると、自分が意図したこととは逆に、相手に不快感を与えたり、案内してもらうことに対して負担を感じる恐れもある。この表現は韓国語では何の問題も引き起こさない好意を表す表現の一つであるが、日本語でそのまま使用すると、逆に失礼な表現になってしまう。

韓国語的な発想からすれば、「案内します」という表現だけでは物足りない感じがするかもしれない。そこで、韓国語での「～(し)てあげたい」という表現を日本語に置き換える場合には、恩恵の意味が含まれる「あげる」を使用せずに、「～(し)たいと思う」という表現を用いた方が、誤解を招くことは少ない。特に、+1レベルで問題になるこの表現は、韓国人日本語学習者が注意しなければならない表現の一つである。

#### ① 失礼な表現になる問題例

1	韓国へいらっしゃったら、いろいろ紹介してあげたいです。(K50)
2	面白いところたくさん紹介してあげますから、楽しみにしてください。(作例)
3	色々なところ案内してあげたいです。(作例)

#### ② 失礼になる問題が解消された例

1	韓国へいらっしゃったら、色々なところへご案内したいと思いますが、いかがですか。(作例)
---	---

上記の例のように、相手に「～(し)てあげる」という表現を用いることを避け、自分が「そのようにしたい」という表現にすることで、丁寧さを保ちながら自分の希望を伝えている。

## (2) 二人称代名詞「あなた」の使用による問題例

1	あなたが早く来て一緒に時間を過ごすことを今、楽しみにしている。 まず、あなたが学会が終わったら、私に電話かけてくれば迎えに行くよ。(K11)
2	ところが、あなた韓国に来たら特に食べてみたい料理とかある？(K29)

今回は友達の名前を指定せずに用紙に〇〇さんへと記入しアンケートを実施したために、「あなた」や「君」という呼び方が文の途中で突然用いられたり、一つの文章の中で呼び方が変化する例も見られた。しかし、これはアンケートの表現に影響されたというより、韓国語の直訳によるものと考えられ、同じ二人称代名詞である「あなた」においては、日本語と韓国語で使用方法が異なるとの認識が必要である。それは、日本語の「あなた」という言葉は、失礼な感じを与えやすい代名詞であることを韓国人日本語学習者に認識させる必要がある。

ここに示した例は、友達への返事である。このように、韓国語の「너(neo)」のつもりで日本語の「あなた」を使うと不自然な場合や、失礼に感じる場合が見られた。

## (3) 自称詞「私」の不適切な使用例

1	先生も召し上がったことがあると思うんですが、私が有名な店を分かっているから、先生を招待したいです。(K2)
2	特に行きたいところがあるのだったら、私に話してください。私も調べておきます。(K17)

今回のアンケートは、韓国を初めて訪問する先生を案内する約束をしていることを前提に記入を依頼した。このように案内する人と案内される人が1対1でメールのやり取りしている場合には、「私が」や「私に」という言葉を用いた表現は、「私があなたのために…を<sup>て</sup>あげる」という意味が含まれてしまう恐れがある。このために相手にしつこい、または、負担を感じさせることもあり得ると同時に違和感も与えてしまう。このことから、例のような韓国語的な表現は、せっかくの気持ちを相手に伝わりにくくしてしまう。しかし、韓国語母語話者はおそらく、「私」という言葉で、熱意や責任を相手に伝えようとしているだけの単純な意図しかないと思われる。既に韓国人日本語学習者の発話における人称詞の過剰使用は母語の影響であると指摘している(鄭2002)ように、今回のアンケートも韓国人日本語学習者による日本語の文章には、このような表現が散見されるのも母語の影響であると考えられる。

## 6. 分析結果のまとめ

分析した結果から、制限の強い領域にある相手の「意思」や「希望」を引き出すことは常に失礼さにつながるのではなく、表現の工夫や敬語の使用次第では失礼さを軽減したり、回避することも可能であることが考察の結果から明らかになった。また、「意思」や「希



望」ほど制限が強くなくても、相手の私的領域にある事柄について聞くことは相手に失礼な感じを与えていることも分かった。以下にその結果をまとめる。

- (1) 相手レベル+1の人の「希望」を直接尋ねている文が失礼にならないためには、次のことに注意する。
  - ①「～たい」を使用する場合には、文末で言い切りの形ではなく文中で連体修飾の形で使用する。または、敬語を併用する。
  - ②「特に」や「一番」のような副詞を併用することにより、希望の範囲を狭め、相手の私的領域に踏み込むことを最小限に抑える。
- (2) 「～つもり」を用いて相手の「意思」を聞く表現は、いかなる敬語と併用しても、また表現に工夫を加えても、目上の人に対しては失礼となり丁寧さを欠くことになる。このことから、相手レベル+1の人の「意思」は間接的に聞くか、必要に迫られた時以外は聞くことを避けるなど、失礼にならない配慮が必要である。
- (3) 「たい」や「～つもり」を使用することなく、相手レベル+1の人の意思・希望を引き出している学習者の工夫内容を以下に示す。
  - ① 可能な限り具体的な質問を避け、広範囲に、かつ、おおまかに希望を聞く。
  - ② 質問の焦点を意思や希望から移し、間接的に質問をする。
- (4) 失礼な感じを与えている文例と母語には次の関係が見られた。  
 韓国人日本語学習者の特徴とも言える表現の中で、「(し)てあげる」という表現を用いたり、相手を「あなた」と呼ぶことや、自称詞「私」の過剰使用など、失礼さにつながる表現のほとんどが、母語の直訳、あるいは母語の影響であると考えられる結果が得られた。

以上アンケート結果をまとめたが、失礼だと感じることは絶対的ではなく、個人差やその状況などにより、感じ方が異なることにも注意する必要がある。

相手の私的領域に踏み込むことは一般的に失礼になると考えられる。しかし、来日する予定や帰国する予定など、私的領域にある行動日程を開いた方が、その計画を正確に滞りなく遂行できることなどから、心配をなくし安心につながる場合には、かえって聞いてくれた方が（私的領域に踏み込む方が）丁寧になる場合もある。このようにその場面、その状況によっては、失礼さを与えない場合も考えられる。

また、私的領域にもその踏み込む強さに段階があり、同じ疑問文を使用しても、私的領域に踏み込んだ失礼だと感じる聞き手がある一方、直接質問するのは失礼になるので、私的領域に触れないように配慮した質問をすることによって、逆に回りくどい質問になることから、的を得ない疑問文となり不快感を与えてしまう場合もある。英語の表現などでは、ストレートに聞くことは失礼にならないと言われている。

同じ疑問文、表現によっても、聞き手個人の受け取り方や感じ方も異なるのは当然のことであろう。また、話し言葉ではイントネーションや表情などで失礼さをカバーできる場合もあるが、今回のように、文章になると同じ表現でも失礼に感じることもある。

## 7. 日本語教育への提案

今回のアンケート調査で、相手の意思・希望を尋ねる時に失礼になる要素や韓国人日本

語学習者の問題点が明らかになった。韓国人日本語学習者の場合、日本語と韓国語の言語形式が類似していることに起因して、無意識に用いた言葉や表現が意外なところで失礼な表現として現れていた。例えば韓国語の場合には、「～（し）てあげる」や「～（し）てさしあげます」という表現を、親切さ、あるいは丁寧さを表すために使用することがあるが、韓国人日本語学習者はこの表現を日本語に置き換えて使用している例がアンケートの結果で見られた。また、目上の人に対して、終助詞の「よ」など、日本語では不適切と考えられる表現も、韓国人日本語学習者に多く見られた。「お楽しみになってもいいですよ。(K50) 先生が召し上がりたい料理とか行きたいところがあったら教えてくださいよ。(K67) など」このように、日本語学習に有利と言われている韓国語母語話者ではあるが、思わぬところで、韓国語では失礼にならない表現が、逆に日本語では相手に失礼な印象を与えてしまう恐れがあるということが分かった。

今回のアンケートの設定内容から、アンケートの協力者は相手の私的領域に踏み込んだ質問をしなければならない状況に置かれていた。韓国の社会では、相手の私的領域に踏み込む質問や会話をすることにより親切さや親密感を相手に表すこともあるため、このような発想による韓国語の表現がそのまま日本語の表現に使われているのではないと思われる。このことから韓国語では相手の私的領域に踏み込むこと、プライベートに関わる質問をすることが失礼につながることは少なく、逆に親密な関係を築く糸口となるなど、考えの相違があり失礼な表現に対する認識が両言語で異なる。このような表現について、任・井出（2000）と新屋（2003）は、韓国人の会話内容に「初対面の相手に恋人の有無を聞く、年齢を聞く、給料を聞く」などの特徴があることを報告している。このことから、文化や習慣の異なる部分を認識すると共に、失礼にならない表現にもそれを反映する必要があると考えられる。

日本語学習者はこのように言語の特徴を理解すると共に、失礼になる表現に対して認識し、失礼にならないように発話に気をつけるなど、丁寧な表現を習得するまでには相当な時間を要するであろう。その上、発話内容が多少失礼であっても、それを指摘されない場合も多く、日本語が上達すると、なおさら注意をもらえない。

「コトバ」レベルで失礼になる要素は、いずれも学習の初級段階で習得する表現であり、教科書で多くの知識を得る海外の日本語学習者にとって、教科書の内容そのものが実際のコミュニケーションの場において活用される可能性は高いと思われる。教科書の会話の設定では親しい友人関係の会話であっても、学習者はそれを応用して、文末に「です／ます」を付加するなどして、目上の人にも同じ表現を用いて質問することが十分に考えられる。

現在、韓国で行われている多くの授業はコミュニケーションに重きを置いた教育とはかけ離れているため、語彙や文法に関する能力は高くても、適切な場面で適切な表現が使えない学習者も多いと思われる。このような問題を改善するためには、会話モデルとして教科書の本文に登場している人物の関係や、会話が行われている場面などに対する理解、そして、最後に、その言語が使われている社会の習慣など、さまざまな知識も理解する必要があると言える。これらの要因が言語表現において大きな違いをもたらす原因となることから、学習者は、それを理解することが必要になる。アンケートの結果からも分かるように、「コトバ」レベルで失礼になる要素よりも事柄レベルで失礼になる要素が多く、その適切な使用方法の習得は特に学習者には難しい。「コトバ」レベルで失礼になる要素は、

そのコトバの使用を避けることで回避することができるため、比較的単純な作業で失礼さをなくすことが可能である。しかし、事柄レベルでの失礼な要素は、個人それぞれの認識や、社会観念によっても、失礼さに対する意識は異なるので、それぞれ異なる言語背景をもつ学習者がそれを判断するのは困難であると思われる。このことは、上手に相手の「意思」や「希望」を引き出ししている学習者の滞在期間と学習期間は、さほど相関がなかったという分析結果からも理解できる。

韓国人日本語学習者における望ましい日本語の指導とは、単に言語形式を対照するだけではなく、語用論的制約（例えば、何を聞くべきか、何を聞くべきではないか、など）も同時に対照しながら指導することが必要である。丁寧な発話とは、「敬語を用いて話すこと」という考え方から、「失礼にならない発話」を身につけるという意識の転換も必要であり、そのためには、初級の段階から待遇コミュニケーション（蒲谷他2003）教育が必要であると言える。

## 8. おわりに

今回、私的領域の中でも制限の強い意思・希望表現に焦点を当て、韓国人日本語学習者に対してアンケート調査を進め、その表現方法について分析した。ここにまとめた結果は、文章全体からの判断ではなく、相手の意思・希望を引き出ししている文章の一部分だけを取り上げ、分析したものであるが、例の中には、失礼な表現を用いて相手の意思・希望を引き出ししているが、文章全体の流れから判断するとそれほど失礼とは感じない例も見られた。このことから全体の表現について分析することも今後の課題として残されたが、韓国人日本語学習者の失礼な表現とそれを回避する方法についてまとめたことは、日本語学習者への効率的な学習方法について、第一歩ではあるが提案をすることができた。

## 注

- 1 私的領域とは、聞き手の欲求・願望・意志・感覚など、個人のアイデンティティに深く関わる領域である。（鈴木1989）
- 2 相手レベルとは、「敬語表現」を考える枠組みとして、「相手」の位置づけ（上下関係と親疎関係）をするためのものである。（蒲谷他1998）

## 参考文献

- 朝倉日本語講座8（2003）「『待遇表現』の諸側面と、その広がり一狭くとらえた敬語、広くとらえた敬語」『敬語』朝倉書店
- 井出里咲子（1999）「親しき仲にも礼儀あり—日韓敬語の微妙な違い」『月刊言語』28-11 大修館書店
- 任采哲・井出里咲子（2000）「似ていて違う？ことばと文化の日韓比較（3）どうしてボーイフレンドがいないんですか」『月刊言語』29-9 大修館書店
- 大石久美子（1996）「「～（し）たいですか」に代表される願望伺いについて—オーストラリア英語母語話者と日本語母語話者の接触場面での問題—」『日本語教育』91-12 日本語教育学会
- （1997）「日本語の願望疑問文の使用制約—「～したい？」「～してほしい？」を中心とす

- るアンケート調査をもとに—』『日本語と日本語教育』26号 慶応大学国際センター
- (1998)「接触場面での上級日本語学習者の願望疑問文の問題」『世界の日本語教育』8号 国際交流基金日本語国際センター
- 窪田富男 (1992)『敬語教育の基本問題 (下)』日本語指導参考書18 国立国語研究所
- 郭常義 (1991)「希望助動詞「たい」の人称制限について—先行研究に対する検討を中心に—」『日本語学科論集』東北大学文学部 日本語学科
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998)『敬語表現』大修館書店
- 蒲谷宏・待遇コミュニケーション研究室 (2003)「『待遇コミュニケーション』とは何か」『早稲田大学日本語教育研究』2号 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 熊井浩子 (1989)「待遇表現指導の一視点—「ほしい・たい」を中心に—」『日本語学校論集』16号 東京外国語大学 外国語学部付属日本語学校
- 鄭恵先 (2002)「日本語と韓国語の人称詞の使用頻度—対訳資料から見た頻度差とその要因」『日本語教育』114-7 日本語教育学会
- 鈴木睦 (1989)「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にしてなりたつか—」『日本語学』8-2 明治書院
- (1997)「日本語における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版
- 新屋映子 (2003)「『配慮表現』からみた日本語 4 縄張りを避けよう」『月刊日本語』7月号 アルク
- (2003)「『配慮表現』からみた日本語 8 終助詞を軽視しない」『月刊日本語』7月号 アルク